

最先端・次世代研究開発支援プログラム
事後評価書

研究課題名	広汎性発達障害における対人相互作用障害の心理神経基盤の統合的解明
研究機関・部局・職名	京都大学・白眉センター・特定准教授
氏名	佐藤 弥

【研究目的】

広汎性発達障害（自閉症などの発達障害の総称。Pervasive Developmental Disorder, 以下 PDD）は、対人相互作用の障害を主症状の一つとする。特に表情コミュニケーションの問題は顕著である。PDD 者は比較的多く、医療・教育現場において独特の困難をもたらすため、その本質的な理解が社会から強く要請されている。しかし現状では、PDD の障害の心理・神経基盤は不明である。本研究は、PDD における対人相互作用の問題について、その心理神経基盤を解明することを目的とした。この目的のため、心理学的・神経科学的な研究により、PDD 者における動的表情処理の問題を徹底的に明らかにすることを目指した。

【総合評価】

	特に優れた成果が得られている
<input type="radio"/>	優れた成果が得られている
	一定の成果が得られている
	十分な成果が得られていない

【所見】

① 総合所見

本研究課題は、広汎性発達障害における対人相互作用障害を動的表情刺激を用いて、fMRI 測定、脳磁図測定、解剖学的 MRI などの画像診断と心理検査を統合させて進められた。計画された研究は概ね順調に進捗し、当初期待した成果が出されている。

当該研究は、広汎性発達障害の診断や新たな治療（教育訓練）につながる可能性があり、本研究終了後においても広範な展開がなされることを期待する。

研究体制・実施、助成金の執行は適切で、国民との科学技術対話の面も評価できる。

② 目的の達成状況

・所期の目的が

(全て達成された ・ 一部達成された ・ 達成されなかった)

本研究課題は、広汎性発達障害者における脳情報処理が定型発達者とどの点で異なっているのかを、動的表情という現実の対人相互作用の媒体を用いて、fMRI 測定、脳磁図測定、解剖学的 MRI、心理検査等を行って解析するものである。当初計画された課題は、進捗状況に前後はあるが、概ね順調に遂行され、その成果も論文として発表されている。研究の過程で起こった問題に対しても、適切に対処されたと判断する。

③ 研究の成果

・これまでの研究成果により判明した事実や開発した技術等に先進性・優位性が
(ある ・ ない)

・ブレークスルーと呼べるような特筆すべき研究成果が
(創出された ・ 創出されなかった)

・当初の目的の他に得られた成果が (ある ・ ない)

これまでの研究成果は、本研究代表者が独自の視点で進めている動的表情という刺激を用いたもので、ヒトの認知に関してより現実に即したものであり、広汎性発達障害者の診断、治療法開発に関しての有用な知見を与えるものである。また、多角的方法論の統合により、従来にない深い理解が得られており、評価に値する。

ブレークスルーについては、新しい手法を用いて広汎性発達障害に対する新たな知見を見出したという点は評価できる。その意味で、基礎領域においてはある程度のブレークスルーと言うこともできるかもしれない。しかし、この種の研究にあっては、その成果の臨床的応用（広汎性発達障害者に対するより良い医療と教育への寄与）を明確に示すものでなければ、真のブレークスルーとは言えないと考える。

④ 研究成果の効果

・研究成果は、関連する研究分野への波及効果が
(見込まれる ・ 見込まれない)

・社会的・経済的な課題の解決への波及効果が
(見込まれる ・ 見込まれない)

本研究課題は、動的表情という刺激を用いて、様々な手法を用いて広汎性発達障害者と定型的発達者を比較するというものであり、その成果で得られた知見は当該研究分野の発展に寄与すると思われる。

広汎性発達障害は、対人関係の不全や教育の困難さ、少年犯罪など現代社会において重要な問題と認識されている。しかし、的確な診断法や評価法が確立しておらず、その全容は不明瞭な点が多い。動的表情刺激による画像を用いた広汎性発達障害の解析結果は、当該障害の的確な診断に資するばかりでなく、脳機能の回復のための訓練法の開発など、治療法の開発にもつながるものであり、その貢献度は高いと考えられる。

⑤ 研究実施マネジメントの状況係

・適切なマネジメントが (■行われた ・ □行われなかった)

本研究課題は、進捗状況に前後はあるものの、その研究計画に沿って概ね順調に遂行された。また、その研究課題を遂行するにあたっての研究体制に問題はなく、研究者間の連絡も密に行われたと言い得る。助成金の執行は効率的に行われ、有効に活用されたと判断する。指摘事項への対応は具体的で、問題はなかった。当初少なかった標本数を増やしたことは、適切な変更であった。

研究成果の発信については、既に 15 件の査読つき論文があると報告され、その他の出版物もあるが、広汎性発達障害以外のテーマの論文もかなり含まれている。比較には必要ではあれ、本研究課題の成果としては割り引いて評価すべきであろう。なお、web ページでの発信なども行われ、科学・技術フェスタへの参加、当事者参加型シンポジウムへの参加など、一般向けの活動も実施された。また、研究成果が新聞・一般雑誌等のマスコミに取り上げられた点は評価し得る。